
いいかげんにしてもらいたい

倉見宗佑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いいかげんにしてもらいたい

【Nコード】

N2311C

【作者名】

倉見宗佑

【あらすじ】

学校の帰り、俺は彼女につかまりコンビニに走らされた。

（前書き）

感想はとても励みになります。

そろそろ夏の蒸し暑さも消え、辺りは秋の色が見え隠れするようになっていた。ついこの前までは暑い暑いと喚いていたのが急に、ある日を境に嘘みたいに寒くなった。毎朝熱心にジョギングをする人はいるが、通学の際、そんな姿を見せられる俺の身にもなっていない。これから一日中座って勤勉に励むという気力を持っていられるのは非常に迷惑である。まあ、それだけ俺が極端な運動嫌いなだけなのだが。暑かろうが寒かろうが、自ら運動しましょう。なんてことは絶対にありえない。

そのはずなのに、なぜ俺は今走っている？

全身にいっぱい汗を溜め、見るからに辛そうな俺を見てあいつは何と思うだろう。いや、考えるだけ無駄か。気遣いどころか逆に、「何やってんの！ 遅かったじゃない！」

……なんて言われてしまうだろうから。しかも想像していたそのままの顔で。というか道のど真ん中で何やってるんですか。道行く人の邪魔のなるから早くどきなさい。

「寒いのに一人で待たせないでよ！」

知ったこっちゃない。こっちはその寒い中全速力で走ってきたんだ。大体、俺が運動嫌いなのを知ってるくせに、わざと俺一人に行かせたのは誰だ。

俺は先程行ってきたコンビニの袋から自分のジュースだけを取り出し、残りをがさつに押し付ける。その反動で少しよろけさせてしまったが、俺はそんなの気にせず家の中に入ろうとする。しかし、またここで引き止められる。さつきも学校から帰って、やっとウチだ〜とか思っていたら、急に後ろから声をかけられてそのままコンビニへ直行。いいかげんにしてもらいたい。

「何」

なるべく短く、それでいて凄みを効かせて言う。しかしこの人はそれをどう受け取ったのか、

「チヨコレートないじゃん！ もう一回、行ってきた！」
などとぬかすのであった。全く効果はなかったようだ。

「自分で行ってよ。自分で」

「嫌。だってまだ暑いし、疲れるじゃない」

何をそんな自慢げに言うのか。腰に手をあてる程の事なのか。というより人を走らせておいてなんだその態度は。

「いいじゃん。よっくん」

「よっくん言うな」

「文句を言わない！ はい、行つてらっしゃい」

そう満面の笑顔で、無理やり俺を送り出そうとする。確かに俺の名前は『良充』だが、今までよっくんと言われた覚えはない。そう毎回違うあだ名で呼ばれたらどうなる。と気がついた時は既に遅し、俺のあだ名は数え切れない程になっている。

そんな勝手なこいつに対し、このまま言う事を黙って遂行するのはどうかと思案をめぐらせていると、俺達の脇を丁度通っていたオバチャンがうふふとか言いながら軽くおじぎなんかしてる。大体考えている事は予想がつくが、それは断じて違う！

「あれ、良充君？」

オバチャンに気を取られていて気がつかなかったらしい。突然後ろから声がしたので振り返ってみると、そこには学校で同じクラスの由美さんがいた。

由美さんとは学校で結構話している。時々宿題とかも見せてもらったり、関係はまあまあ良好と言えるだろう。

まるで登場するタイミングを見計らっていたような感じだが、それは置いておこう。しかし助かった。これでコンビ二行きは回避できるかもしれない。

「あ、由美さん。……そうだ、この前のプリントなんだけどさあ」

「え？ あ……うん」

よし、掴みはこれでいい。このまま何事もなかったののようにこの場から離れられれば……。

「よっくん、誰？ その子」

おいしい。もう少しだったんだけどな。しかし、まだこちらが優勢。これからどう切替すかで、走らなくてすむはず。

「クラスで一緒の——」

「よっくんって……良充君、この人誰？」

予想外の展開。まさかここにひっかかってくるとは思わなかった。それに気のせいだろうか。由美さんが少しむくれているように見えるのだが。

気がつけば、その場の空気は重々しくなっていて、いつの間にか二人の女性に挟まれていた。飛び交う視線が痛い。

というより、そもそも何故こんな事になっているのだろうか。思考回路をフルに使うと思っただが、案外答えは簡単に出た。

——あれだな。由美さんは勘違いをしている。

そうだな。確かに体は小柄でかわいいと言えばかわいいとしか言いようが無いが、

「由美さん」

「？」

俺は彼女に向けて指を差す。

「これ、ウチの母さん」

その後は勘違い騒動という事で丸く収まり、由美さんは赤い顔をしながら帰っていった。よっぼど恥ずかしかったのだろうか。余談だが、俺のコンビ二行きはいつ間になくなっていった。予想外ではあったが、結果オーライという事だ。

しかし、母さんの若さには驚かされてばかりだ。それに加えてあの性格。初めて会った人はほとんど年齢を見間違える程だ。

だから、母さんにはではない。その若さに、いいかげんにしてもらいたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2311c/>

いいかげんにしてもらいたい

2010年10月15日22時20分発行